優秀修士論文概要

〈単性生殖〉の戦後文学

三林優樹

本修士論文は、戦後妊娠小説の〈単性生殖〉表象の分析を通して戦後文学のジェンダー秩序の一端を明らかにすることを目的とし、それとともに妊娠小説ジャンルを戦後文学史に位置づけ記述する方法の考察をねらうものである。そのために召喚されるのが太宰治、石川淳、三島由紀夫、吉行淳之介、津島佑子の五人の作家であり、彼／女らの戦後の小説を対象に、〈単性生殖〉という表象がどのように現れているのかを明らかにする。

序章「なぜ〈単性生殖〉なのか？」では、〈単性生殖〉テクストがどのような文学であるのかを定式化した。戦後初期において宗教的なモチーフ、とりわけキリスト教をモチーフにした文学は多く存在するが、聖母マリアの「処女懐胎」というモチーフを扱った文学は少ない。このように周縁的な概念であるものの、しかし本論文では繰り返し現れる〈単性生殖〉の表象に、戦後における占領の諸相、セクシュアリティ、男性の自己意識といった中核的なテーマを読み込む。テクストを分析する際に援用されるのが男性性研究である。近年男性性研究を援用した文学研究は増加の兆しを見せているが、しかし個別作家論に定位したものが多く、時代横断的に扱ったものは少ない。本論文はそれを課題として認識し、男性性研究の文学研究への援用を目指す。また〈戦後〉という状況に目を向け、改めて〈戦後〉を冠する文学史はどのように可能なのかという問いを本論文全体の課題として提起した。

第一章「〈単性生殖（フィクション）〉の起源――太宰治「斜陽」のケアワーク――」では、第一節でかず子のセクシュアリティがアメリカによって配給されたものであるがゆえに、アメリカ殺しのモチーフをもち、そこから新しい自己のセクシュアリティの真実を掴む契機を獲得することを論じた。第二節では、かず子と対照的な直治の存在を論じた。戦後の復員兵である直治は沈黙を貫き、「不気味なもの」の存在としてテクストに現れる。彼は自分のセクシュアリティを獲得することはできないし、ミソジニー的な意識を抱えている。このようにテクストはかず子と直治を極めて対照的に構造化した上で配置しているのである。第三節ではテクストの構造化の意味を論じた。テクストにおいて反復される「赤」の色彩のモチーフや、「あ」という音声のモチーフに明らかであるが、これらのモチーフは読者がテクストを構造化する際の契機として表象されており、いずれのモチーフもかず子のセクシュアリティに結びついている。そしてテクスト終末部において、かず子が「イムポテンツ」であるはずの直治の子供を抱き、直治の象徴的な生殖能力を癒やそうとするケアの場面がある。ここに戦後の〈単性生殖〉の起源が現れているのである。

第二章「親密性の検閲――石川淳「処女懐胎」の暴力の痕跡――」では、第一節で石川淳の戦後の小説がフラタニゼーションの回避によるテクストの自己検閲化にあるとした。「黄金伝説」でＧＨＱ／ＳＣＡＰの検閲から筆禍に遭った石川は、それ以降占領兵と日本人女性の親密な関係をテクストに直接描写することを避けるようになる。「雪のイヴ」をはじめ、彼らの関係は極めて暗喩的な痕跡としてのみ語られるようになるのである。「処女懐胎」もまた、そうした自己検閲化したテクストの延長線上にあり、その点に石川淳の戦後のテクスト戦略がある。第二節では、主人公の貞子は「黄金伝説」や「雪のイヴ」で形象化された「パンパン」と通底する存

在であることを論じた。テクストで性暴力を受ける貞子は、戦後を生きた「パンパン」の女性たちの苦悩と通底しているのである。そのことを「パンパン」言説と内面の記述が回避される貞子の存在から論証した。第三節では、そうした戦後の暴力的諸相を可視化するように、男たちは貞子に暴力を働くが、自らも傷ついてしまうことを論じた。兵士としての責任の因果を含められるように、彼らは暴力の代償として傷を受けるのである。それは戦後になって兵士の身体をリセットしようとすることの弊であるように描かれている。第四節では自己顕示的な語り手の存在に注目して、人物の暴力を痕跡化するように、言語による行為遂行的な暴力の様相をテクストは主題化していることを論じた。貞子の〈単性生殖〉は、以上のような戦後の暴力の諸相を象徴的に可視化するように懐胎されたのである。

第三章「男たちを暴く場――三島由紀夫「美しい星」のミサンドリー――」では、第一節で暁子が持つ「処女懐胎」に至る妊娠への意味付けを確認した。暁子の妊娠への意味付けは当初は自己陶酔的な「純潔」であったが、「処女懐胎」を契機に男たちのホモソーシャリティへの批判的想像力へと変化するのである。第二節では、本テクストにおける妊娠は男たちによっても語られる場であるという認識から、男たちの妊娠への意味付けと、それを読み替えてテクストに存在する彼ら自身のつながりを検討した。テクストにおける男同士のつながりは、妊娠表象をネガとして、つねに周縁的な男性性から構築される彼らの自己嫌悪的相互批判によって成立している。そして第三節では、「美徳のよろめき」を参照しながら三島の妊娠小説における主たる問題を抽出し、「美しい星」の妊娠表象と比較して論じた。「美しい星」では、男性性と妊娠表象の関係について、従来の三島の妊娠小説の構成とは異なる要素が見出せる。それは、「美徳のよろめき」が問題化した「内なる優生思想」による人工妊娠中絶を乗り越えるかのような、「美しい星」の人工妊娠中絶の拒絶だとした。以上を踏まえ、テクストにおける妊娠表象は、現実の差別表象に対する批判原理として存在しているのだと論じた。

第四章「その性を理解するということ――吉行淳之介「技巧的生活」の想像妊娠と性的不能――」では、第一節で高度経済成長期におけるモノへの欲望の氾濫と、それにかんするゆみ子の主婦への欲望を論じた。テクストに表象された自動車、テレビ、クーラーはいずれも性的な描写と結ばれながら、ゆみ子のセクシュアリティと主婦への夢を象徴している。第二節では、同時代のホステスの言説を確認した上で、ホステスとして働くゆみ子の苦悩を論じた。ホステスはこの時代の女性が結婚を必要とすることなく働き続けることのできる職業であるが、ホステスという職業の特性上、固有名を奪われたゆみ子はどれが本当の自分なのかといったアイデンティティの課題を抱えているのである。第三節では想像妊娠の同時代言説を参照しながら、想像妊娠するゆみ子と妊娠したものの流産してしまうホステスのよう子との連帯を、ゆみ子が暗に示していることを論じた。ゆみ子の想像妊娠は空想上のものとして油谷に退けられるが、妊娠した女性同士の連帯関係がゆみ子とよう子との間で築かれるのである。第四節では、油谷が海軍士官として表象されていることに注目して、同時代の山本五十六像を確認しながら、油谷の抱える性的不能のモチーフを論じた。油谷は海軍士官のようにスマートでありつつも、滑稽な性的不能性を抱えている。それは敗戦による、戦後日本の男性の去勢の乗り越えに対するアイロニカルな表象であるが、しかし油谷の性的不能は最終的にゆみ子に見限られてしまうことによって、弱い男性性のアイデンティティが温存されてしまうのだとした。

第五章「継承される記憶／廃棄される性欲――津島佑子「寵児」と生政治――」では、第一節で同時代の想像妊娠の言説を確認した。そこで見いだせるのは女性のヒステリーと医学的ディスクールの共振であり、それに

逆らうようにして存在する高子である。またそうした医学言説が生政治の具体化としてあることを論じた。第二節では高子の全共闘の記憶へのこだわりから、高子の抱えるモチーフが他人の傷付きやすさへの反応だとした。このモチーフは自分の子供の夏野子に密接にかかわっている。第三節では、障害をもち戦後まもなく亡くした兄への記憶を保持していることに注目して、戦後の生政治のなかで廃棄される障害者を想起するように存在する高子のモチーフを論じた。第四節では、そうした高子の存在を裏側から誘導するような男たちのあり方について、それが性欲の他者への投影と自己廃棄から成り立つ、これまで論じてきた生政治の機構と一致していることを論じた。

終章「〈単性生殖〉が懐胎するもの」では、各章の結論として、〈単性生殖〉の戦後文学から浮かび上がってくるものとして二つのモチーフを論じた。ひとつは、妊娠する女性ジェンダーから浮かび上がる、妊娠を契機にして女性同士での親密性を作り上げようとするモチーフである。もうひとつは、女性を孕ませる存在としての男性ジェンダーから浮かび上がる、男性の性的能力にかんする意識、直截に言えば「性的不能」のモチーフである。以上を踏まえ〈単性生殖〉の文学史の今後の課題として、平成文学における〈単性生殖〉テクストの地平の可能性を提起した。

〈単性生殖〉テクストの戦後は、妊娠を契機とした女性同士の親密性と男性身体の生殖にかんする能力、性的不能の言説を結び合わせ、このように成立したのである。忘却されようとする男性ジェンダーの身体を、そして不可視化される女性ジェンダーの身体をどのようにすくい上げ、文学史として記述することができるのか。それは「戦後」を冠して記述することの意味を自覚し、彼／女らの身体の当時のあり方を周辺言説と往還しながら徹底的に探索し記述することによってしかない。本研究は〈単性生殖〉をテストケースとして、妊娠する身体に向き合うことによって戦後文学史の一つの道筋を示したにすぎない。しかしその「戦後文学」の可能性はいまだ忘れられた多くの妊娠小説に眠っているだろう。

優秀修士論文概要

〈残滓〉としてのプロレタリア文学

宮　喬　瑞

本修士論文の眼目は、「プロレタリア文学」という名称の下で総括された作品群あるいはその運動を、精神分析的アプローチを援用し、それ自体の分類状況に由来する定位不可能性――言説・評価システムとしての「日本近現代文学史」から見れば〈残滓〉（最も不活発にして余計なもの）的存在としてのあり様――を現前化することにある。なお、斯様に存立している「プロレタリア文学」から当時のプロレタリア文学者の思惑を探求するのではなく、人間の一時期において一問題をめぐって無意識に出された反応として、すなわち一つの「症候」として読むことで、「プロレタリア文学」という政治的・文学的・精神的地層でわれわれの精神的構造の解明をも試みる。そして、その成果をもってプロレタリア文学における精神分析批評の可能性を提示し、今後のプロレタリア文学研究の理論的展開に役立てればと思う。

プロレタリア文学研究（者）にはいくつかの立場がある。だが、プロレタリア文学運動及びその倫理観を肯定的に見るにせよ、否定的に見るにせよ、もしくは中立を保つにせよ、研究（者）の立場がつねに条件づけられており、ニュートラルではあり得ない。もちろん、研究対象であるテクストもそうした豊富さを具えている。古典的なマルキシズム批評ならばおよそそれらを取り囲む「物質的条件」が問われることになるだろうが、本論ではその「物質的条件」の延長線上にある「精神的条件」、つまりテクストに表象されている錯綜した想像的関係（＝イデオロギー作用）に注目する。従って、そうしたイデオロギーの作用・効果を説明する上で効果的な精神分析批評を導入したわけである。それは各作品の内部にある作中人物を精神分析的に読み直すことにとどまらず、プロレタリア文学が一つの統合された記号として、社会全体のナラティブと如何に関与するかといった問題にも繋がっている。

従って、ラカン派精神分析理論の用語である〈残滓〉を使用したのは、「文学性」を評価の主軸とする「日本文学」にとって、そうではない「政治性」を特徴とする「プロレタリア文学運動」が実に位置づけ難い存在であり、不活発にして余計なものであることを顕在化しようとする所以である。〈残滓〉というのは、大雑把に言えば、自明に「そこにある」が故に確認できる、記述可能な肯定的・積極的存在ではなく、むしろ、「近現代文学」の不在としてしか捉えられない否定的・消極的存在を指している。さらに、〈残滓〉という視座に立つことによって、「プロレタリア文学」を「日本文学」という概念に回収する時に遭遇する失敗、根本的に言えば「文学」というシニフィアン自体の不可能性がより明瞭に見えてくる。このように、カテゴリーとしての「日本近現代文学史」を相対化する視点を、精神分析批評を経由して獲得し得るかと考えられる。

なお、視線をカテゴリー問題から各テクストの内部にある個々人の実態に移した場合でも、闘士の新たな性的関係への想像や伏字をめぐる検閲側と検閲される側との想像的対抗など、運動に関わる者たちの精神的活動に密接する要素がたくさん書き込まれているので、精神分析批評が依然として効力を有していると言えよう。

第一章　〈残滓〉としての可能性
――武田麟太郎「暴力」を例に――

武田麟太郎の代表作であり、多岐にわたる文学的要素を具えている「暴力」というテクストを例に、プロレタリア文学の〈残滓〉なるカテゴライズ状況を見つめ、そしてその〈残滓〉である状態自体には、如何なる意義を内包しているかを検討した。その結果、「日本文学」が一つの整合的全体として読まれてきたが実は内的不一致な言説システムに他ならないことを、「プロレタリア文学」の有する、システム全体にとっての〈残滓〉なる特性をもって、明るみに出した。よって、「文学性」というシニフィアンそのものの不可能性・必然的失敗を前景化し、「文学性」を暗黙の座標系とする「日本文学」自体を相対化する視座を、精神分析理論を経由して獲得し得た。そうした相対的視線をもってはじめて、従来の「「日本文学」が中心――「プロレタリア文学」が周辺」という対立ではなく、対立関係そのものを見直し、言わば一種の「メタ批評」が実践できるようになった。

第二章　想像された「女性」性
――「赤い恋」と「「赤い恋」以上」の間――

いわゆる「女性解放」という大きなテーマに関わる「愛情の問題」を扱う徳永直の「「赤い恋」以上」とその話題の嚆矢となるコロンタイの「赤い恋」から、類似したいくつかの運動における男女間の性的関係に関する認識的齟齬が読み取れた。運動における性的関係に対して、時空間の異なる「赤い恋」は言わば「自由恋愛」的な楽観的答えを持ち出した一方、「「赤い恋」以上」は答えを出すのを控え、やや悲観的に自由奔放な性関係を見ている。そして、この一連の齟齬を生じたのは、まさにこれらのプロレタリア文学が「女性」解放などを掲げながらも、すでに形作られた従来の「性」関係への想像（＝われわれが思う「女性」性と「男性」性）を階級闘争という文脈で見直さずに、無頓着に利用したための結果に他ならない。従って、天然・自然だと思われる男女の性差及びその上に築き上げられた人間関係・女性解放問題を論じる前に、われわれの精神的構造における「想像」の果たした役割を考慮に入れつつ、何が「女性」「男性」なのかを見直す必要があると提言した。

第三章　夢から醒めた夢――江馬修「きよ子の経験」から見るイデオロギー作用――

「赤い恋」以上」と異なり、運動中の夫婦関係ではなく、「ハウス・キーパー」の生存状況に目を向けた「きよ子の経験」は、「「赤い恋」以上」以上にイデオロギーの問題が問われることになる。そして、その浅薄・硬直・図形化と評されるきよ子を描き得たのは、作者自身が所有するイデオロギーの効果なのである。「プロレタリア文学」として最も基本的しかも最も堅持すべき、或る意味でその名をつけ性質を決めるイデオロギーというものの作用を、それを無意識にあるいは自明なものとして容易に放棄した「きよ子の経験」のテクストにおいて、女性嫌悪や男性性欲の正当化など、本来プロレタリア運動が打倒すべきブルジョア的イデオロギーが、皮肉なことに、却って「プロレタリア文学」――しかも闘士の「愛情の問題」を扱う「きよ子の経験」によって、再生産されることとなる。これはまさにイデオロギーの現実性・自己普遍化作用がプロレタリア文学で広げた波紋であり、またプロレタリア文学を精神分析用語で言う「症候」として読めることの証左でもある。

第四章　「伏字」という外見――「小説の書けぬ小説家」における想像的関係を読む――

他方、「転向声明」によって、自分の立場が逆転したと公の場で宣言した場合、その最も争うべきイデオロギーというポストを手放した場合、闘争はまた如何なる形で如何なるレベルで、展開され得るであろうか。「小説の書けぬ小説家」において、中野重治はプロ文学とは「文」をもって階級闘争を行うものだ、という本質を掬い上げ、プロ文学が作品のあらゆるレベル・ポストで「闘争」を展開すべき、そして展開しなければならないものに他ならないことを、当時の読者に想起させようとした。具体的に、「転向声明」発表後「内容」レベルにおいて人間の支配的関係を明言できなくなる場合、文字の並べ方としての「外見」レベルにおいてもなお当局と闘争し得るのだと、中野重治は「転向五部作」をもってその一進一退の「表現戦」を演習して見せた。重要なのは、そこで使われる方法とは他ならぬ「想像的関係」なのである。つまり、情報の不在としての無意味なプレースホルダが参加者の想像によって却って何らかの意味を持ち得るものとなる。「鈴木　都山　八十島」においてそのプレースホルダは過剰に押された「伏字」であり、後で発表された「小説の書けぬ小説家」においてそれは「小説が書けぬこと」なのである。つまり、作品全体が一つの大きな「伏字」として機能していると言えよう。しかも、伏字をこのように「意味の不在」から「意味の現前」への変身をさせたのは、まさにわれわれの精神的作用、つまり想像的関係にほかならない。

以上のように、われわれの生活しているシステム自身の合法性を問う〈残滓〉なる問題意識をもって、四篇のプロレタリア文学を読み直してきたが、階級闘争が終息、冷戦も終わってから約三〇年が経過したという、階級闘争・イデオロギー闘争が退潮した今現在では、そうした作業はまだ有意義なのだろうか。終章ではこの問題について展望を述べた。

階級闘争が退潮した現在では、われわれは自由・平等・権利などが経済によって保証されている、大文字の政治がなくても合理的に発展し得る、いわゆるポストモダン社会で暮らしている。しかし、それはあくまでも一つのイデオロギーの一効果、つまり一つの夢に過ぎない。他方、人間の支配・被支配関係を階級的視点から捉え、労働者が剰余価値を搾られている資本主義という人類の先史時代を終わらせ、社会主義という本当な人類史を開くべきだというのも、ポストモダンと同様に、一つのイデオロギーによって紡がれた夢に他ならない。ただし、重要なのは、そうした相抵触する二種類の夢を同時に見ることができない。つまり、別種の夢の存在を知り、そしてある程度理解できたならば、もうもとのままにもとの夢を見られなくなる。従って、言わば村上春樹らが代表者となる現在の「日本文学」において、プロレタリア文学を研究対象に選定するのは、同様な理由で、後者の古い夢をもって、われわれを前者の夢から目覚めさせることを目指しているからである。次にまた何とか新しい夢を必ず見るにしても。